

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第5章「命」

1

本店に乗り込んだ首相

万策は尽きた」。3月15日、福島第1原発では2号機格納容器で圧力が上昇し、破損して大量の放射性物質が放出される恐れが高まっている。なすすべのない東京電力に懐る首相。首都圏をも巻き込んだ東日本の広域が汚染される史上最悪の事態は避けられるのか。「回避せよ」。所長の命令が下る。事故発生から5日目、免震重要棟は運命の朝を迎えた。

「撤退したら東電は10パーセントぶれる。逃げてみたって逃げ切れないぞ」。3月15日午前5時35分すぎ、東京・内幸町の東京電力本店の緊急時対策室に首相の菅直人(64)の怒声が響いていた。「シートを放棄した」という



統合対策本部立ち上げのため東京電力本店に入る菅直人首相(当時・中央)＝2011年3月15日早朝、東京・内幸町

ことになるか知っているはずだ」。

目の前に、こわばった表情の東電会

政府と東電が一体で事故収束に当たる統合対策本部を設置する。首相

菅は乗せた専用車はガムのツラ

ツシの中を地下駐車場に入った。

2階の対策室では経済産業相の海江

田万里(62)らが既に待機していた。

統合本部事務局局長を命じられた首相

ものだ。ふざけるんじゃない」と最

後に言い放つと、打ち合わせの小部

屋を用意するよう求めた。演説は10

分以上に及んだ。

菅の激しい言葉に免震重要棟の社

員たちも足を止め、テレビ会議の画

面に見入っていた。

「このままでは日本国滅亡だ。撤

退などあり得ない。命懸けでやれ」

菅はこの時の言動を振り返り「怒

時。共同通信 太田久史)

「逃げ切れないぞ」

「60(歳)になる幹部連中は現地

鳴り散らしたなんて意識は全くな

に行つて死んだつていいんだ。俺も

行く。社長、会長も覚悟を決めてや

れ!」

社長の清水正孝(66)を午前4時す

思いを強い言葉で言ったかもしれな

いけど、彼らを怒って感覚はない

んだよ、俺には」

一方、事故対応に当たった政治家

の多くは、テレビ会議の存在をこの

時初めて知った。1号機の爆発をテ

レビのニュースで知らされるほど情

報伝達の遅れにいら立っていた菅に

は驚きだった。

「本当にびくびくしてた。でかいス

クリンがあつて、第1原発とな

がってるじゃない。『なんだこれ』

つていつか、これがあるのになんで

あんなに官邸に情報が伝わるのが遅

いんだと…」

政府と東電の意思疎通改善を目指

した統合本部設置。だが危機を救う

には遅すぎたと菅は直後に思い知ら

される。(敬称略。年齢、肩書は当